



日本にオオセッカは何羽いるのか

上田 恵介

立教大学理学部動物生態学研究室 〒171-8501 豊島区西池袋 3丁目34-1

オオセッカ *Locustella pryeri* は極東地域の固有種であることに加え、その分布が非常に局地的であること、また繁殖個体群が1か所に安定的に維持されることのないという、生息の不確実性が非常に高い種としてこれまで認識されてきた。戦前、唯一の繁殖個体群が観察された宮城県蒲生の個体群は発見後すぐに消滅し、それ以来30数年間、1972年に津軽半島屏風山地域の湿原で営巣中のオオセッカが発見されるまで(大八木 1973)、繁殖地のわからない“幻の鳥”であったことからこのことは明らかである。その後、1973年に秋田県八郎潟干拓地で繁殖個体群が発見された(西出 1975)のに続いて、青森県内では1975年に岩木川河口と高瀬川河口部の河川敷で、そして1980年には仏沼干拓地で繁殖期の生息が確認され、本種の将来に比較的明るい展望が開けたかにみえたが、八郎潟の個体群はその後、どんどん減りつづけ、現時点ではほぼ消滅してしまっている(山階鳥類研究所 1998)。

しかもオオセッカの個体数は、これまでは国内にわずか1,000羽程度とされてきた(金井・植田 1994)。これは前述したオオセッカの特性に加え、偶然の個体数変動や予測できない生息地の環境の変化を考えると、とうてい安定的に個体群を維持する上で十分な数とは言いがたく、本種の保全は多くの研究者や自然保護に関心を持つ人々の注目を集めてきた。

本種の保全には、各地に点在する個々の生息環境を場所ごとに厳重に保全していくことはもちろんであるが、常に分布域全体の個体群の時間的・空間的動向を把握しておく必要がある。そこで、2001年の繁殖期に、現在日本で知られている本種の繁殖地のうち、比較的まとまった数が生息することが知られている青森県岩木川河口と屏風山周辺、仏沼干拓地、そして茨城県利根川下流域にて個体数調査を行ない、日本全体で現在オオセッカがどれくらい生息しているのかを推定した。

調査は日本野鳥の会青森県支部と立教大学動物生態学研究室を中心に、日本野鳥の会自然保護センターの小林豊、国立環境研の永田尚志、日本野鳥の会弘前支部が加わり、この 3

か所を分担して調査した。仏沼の調査は三沢市による環境教育牧場モニタリング調査の一環として、また岩木川と利根川の調査の一部は日本野鳥の会のオオセッカ生息状況調査の一環として行なわれた。

その結果、仏沼では2001年 6月24日の調査では446羽、7月22日の調査では448羽が確認された(中道・上田 2003)。7月15, 29, 30日に地域を分担して調査された岩木川河口周辺では142羽のさえずり個体が確認され、また屏風山地域(平滝沼, ベンセ沼, 田光沼)では9羽のさえずり個体が確認された(小林・小山 2003)。利根川では7月5日に一斉調査を行ない、375羽のさえずり個体が確認された(永田ほか 2003)。このさえずり個体数を最低個体数として扱って、調査した3か所で、さえずり雄が合計972~974羽という結果になった。

岩木川では、河川敷の調査では見落としの可能性はあるが、屏風山も含めてほぼ全数が計数されていると思われる。仏沼でも調査地全域をくまなく調査出来たので、見落としはないと言える(ただし仏沼から離れた点在した休耕田にも少数の個体が生息していることがわかっている)。一方、利根川では、河川敷の幅が広いため、堤防からの個体数調査では生息域全体を把握することができなかった。そこで、カバーすることのできなかった面積を平均密度をもちいて単純補正したところ614羽、オオセッカの環境選好性を考慮して算出したところ、598羽という生息推定個体数が算出された。

この環境選好性を考慮した補正個体数を最小推定値の算出に採用すると、調査を行なったオオセッカの主な生息地である仏沼、岩木川周辺、利根川の最小推定値は1,195~1,197羽となる。これは雄だけの数であるから、仮に性比が1:1と仮定とすると(オオセッカは一夫多妻が報告されているが、普通、一夫多妻といっても性比が偏っているわけではない)、雄と同数の雌がいることになるから、この3か所での繁殖期の成鳥の生息個体数は約2,400羽ということになる。ただし実際には、この3か所の調査とも、繁殖期が進んでいて給餌中の雄のさえずり頻度が落ちていることも考慮すると、現在、日本列島にはざっと見積もって2,500羽強のオオセッカ繁殖個体群が維持されていると考えていいだろう。これは従来言われていた生息数の2.5倍であるが、先に書いたオオセッカの生息特性を考慮するとき、決して多い生息数ではないと言える。またこの2,500羽から毎年生産される若鳥の次世代繁殖個体群への寄与についても、私たちは何のデータも持ち合わせていない。若い鳥たちが冬を越えて、新しく繁殖なわばりを確保できる場所が十分に供給されているかどうか、今後、オオセッカがその個体数を順調に増やせるかどうかは決定的に重要である。

われわれのこの生息数調査の結果を基に、将来に向けてオオセッカ保護がさらに進むことを期待したい。

引用文献

- 金井裕・植田陸之. 1994. オオセッカの生息地の分布と現状. 平成 5年度希少野生動植物生息状況調査報告書. pp. 1-7. 環境庁, 東京.
- 小林豊・小山信行. 2003. 青森県岩木川下流域におけるオオセッカの繁殖期の個体数. *Strix* 21: 29-34.
- 永田尚志・上田恵介・古南幸弘. 2003. 利根川下流域におけるオオセッカの生息状況. *Strix* 21: 15-28.
- 中道里絵・上田恵介. 2002. 仏沼湿原におけるオオセッカ個体群の現況と生息地選好. *Strix* 21: 5-14.
- 西出隆. 1975. 八郎潟干拓地におけるオオセッカの生態 1. 干拓地の分布と繁殖地の概要. *山階鳥研報* 7: 681-696.
- 大八木昭. 1973. オオセッカの繁殖を確認. *野鳥* 38(1): 4-8.
- 山階鳥類研究所. 1998. オオセッカ生息状況調査報告書(鳥類編), 仏沼干拓地編/八郎潟地域編. 東北緑化環境保全株式会社, 仙台市.

Recent status of the Japanese Marsh Warbler in Japan

Keisuke Ueda

Laboratory of Animal Ecology, College of Science, Rikkyo University, Nishi-Ikebukuro, Tokyo 171-8501, Japan

The Japanese Marsh Warbler *Locustella pryeri* is listed as an endangered species in the Japanese Red Data List. The total population of the Japanese Marsh Warbler is estimated at about 1,000 individuals and is in danger of extinction. The breeding area of the Japanese Marsh Warbler is restricted to several marshes in northern Japan. We counted the whole population of the Japanese Marsh Warbler in the main breeding areas in the late breeding season, June and July, 2001. We only counted the number of singing males in the territories and recorded 972-974 individuals in total. Some area of reedbed were too distant from survey routes to be covered, so the number of singing males there was estimated by a stepwise multiple regression procedure. This gave an estimate of the total number of singing males of 1195-1197. If the sex ratio is unity, this suggests that ca. 2,500 breeding individuals of the Japanese Marsh Warbler occur in Japan now.

Key words: Japanese Marsh Warbler, *Locustella pryeri*, population status